

- (19) 古今和歌六帖は、新編国歌大観二巻による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の古今和歌六帖の引用も同様である。
- (20) 夫木和歌抄は、新編国歌大観二巻による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の夫木和歌抄の引用も同様である。
- (21) 日本古典文学全集『万葉集③』（小学館）、一六頁。
- (22) 貫之集の引用は、新編国歌大観三巻貫之集による。歌番号もそれに従う。

題の歌には、従来は夏草題ではなかった歌（三三六五、三三七三、三三七四など）を収めているところに、中世的傾向が看取されよう。

夏草の歌は、人麻呂の歌にその表現形式の確立が確認され、人麻呂継承の跡が貫之にあると想像され、中世の新しい表現様式の模索を夫木和歌抄に辿ることができると考えられるのである。『おくのほそ道』での平泉における「夏草や兵どもが夢の跡」の句にみられるように、詩歌の世界での夏草詠には夏草のイメージの定着と深まりとの様相が看取されるが、それは、万葉集の時代から中世にいたる以上のような系譜の果てに獲得された表現意識であると言つてよいのではないだろうか。

【注】

- (1) 古今集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の古今集の引用も同様である。
- (2) 続後撰集の引用は、新編国歌大観一巻による。歌番号もそれに従う。
- (3) 用例の検索は、「春草の」「夏草の」「秋草の」「冬草の」という表記に限定するものとする。
- (4) 用例の検索は、枕詞の検索と同様に「春草」（「春草の」を含む）「夏草」（「夏草の」を含む）「秋草」（「秋草の」を含む）「冬草」（「冬草の」を含む）という表記に限定するものとする。「春草」でいうと、「はる草」「春くさ」「はるくさ」は省く。「夏草」「秋草」「冬草」についても同様。
- (5) 古事記の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれ

に従う。

- (6) 万葉集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の万葉集の引用も同様である。
- (7) 人麻呂歌集の引用は、新編国歌大観三巻柿本集による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の人麻呂歌集の引用も同様である。
- (8) 渡瀬昌忠著『柿本人麻呂研究 歌集篇上』（桜楓社、昭和48）、二四三頁。
- (9) 新古今集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。
- (10) 新古今集一三七五番の「夏草の露分衣着もせぬになどわが袖の乾く時なき」の元歌である、万葉集一九九四番（巻一〇・作者不詳）は、柿本集下七三番、赤人集二六七番「なつくさのつゆわけごろもまだきぬにわがころもではひるよしもなし」（国歌大観三巻）、古今和歌六帖三二九一番「なつくさのつゆわけごろもきもせぬにわがころもでのかわくときなき（第五帖服飾・夏ごろも）」（国歌大観二巻）にも載せられている。
- (11) 『契沖全集第八巻』（岩波書店、昭和48）所収『古今余材抄』五六、五七頁。
- (12) 目崎徳衛著『紀貫之』（吉川弘文館、平成20新装第四刷）には、七九一番を「作者「雲林院のみこ」（常康親王）の運命と心情とを両つながら偲ばせる」（三二頁）歌とあり、本来は恋歌ではないとの見解が示されている。
- (13) 目崎徳衛著『紀貫之』（吉川弘文館、平成20新装第四刷）、二二頁。
- (14) 前掲書、二二頁。
- (15) 前掲書、二二頁。
- (16) 前掲書、二二～二二頁。
- (17) 前掲書、三二頁。
- (18) 前掲書、三二頁、八〇頁。

三百六十首中 よしただ

夏麻の下葉の草のしげさのみ日ごとにまさる比にもあるかな

(三三六九)

おなじく おなじく

大原やせがみのみくさかり分けておりやたたましすみがつらに

(三三七〇)

おなじく おなじく

わがせこがきませりつるか(つら)と見ぬ程に庭の小草もかたまよひせり

(三三七一)

家集、夏恋 俊頼朝臣

あふ事はなつ野に茂る恋草の刈りはらへどもおひ結びつつ

(三三七二)

寛喜元年女御入内御屏風 従二位家隆卿

森の陰まだほに出でぬ夏草の袂すずしき山の井の水

(三三七三)

建保三年名所百首 前中納言定家卿

ふみしだく浅香の沼の夏草にかつみだれてそふ忍ぶもぢずり

(三三七四)

夫木和歌抄の分類では「夏草」のみ歌題に採られており、「春草」「秋草」「冬草」題のものは含まれていないことが注目される。この

ことは、たとえば平安期に成立した古今和歌六帖の第六帖「草」題

(六八題)の最初に「はるの草(春草)」「七首」、「夏の草(夏)」「一

一首」「あきの草(秋)」「六首」、「冬の草(ふゆ)」「(四首)と並んで

いる形態と比較してみても、中世的な傾向と受け取れるだろう。

鎌倉期の定数歌においても、宝治百首では夫木和歌抄と同様に、

採られているのは「夏草」題だけである。このことは、「夏草」題を

採る室町期の延文百首、永享百首などにも共通する現象である。正

徹千首の場合、「春草」題と「夏草」題とを採るが、この千首は、か

なりの量が家集の草根集に収められているものであるから、むしろ

私家集とみなすべきものであろう。「夏草」題を採る歌合の例では、

時代を遡って天徳四年(九六〇)内裏歌合、平安末期の六百番歌合

などでも、採られているのは「夏草」題だけということになる。

このようにみえてくると、歌合や定数歌において「夏草」題が定着

しており、その傾向は中世に特に顕著になることが理解される。ま

た、夏草の歌の勅撰集入集の用例(古今集の二首を始め新葉集まで

の五〇余首)のうち、「夏草の」という枕詞の表現例と解されるもの

が二八首——「繁」(しげれる、しげみ、しげき、ことしげき)一九

例、「深し」四例、「野島崎」二例、「かり」二例、「はは」一例——

と半数を占めており、類型化された夏草の歌の伝統が継統していることが知られる。一方、題詠の手本とみなされた夫木和歌抄の夏草

六百番歌合

前中納言定家卿

夏山の草ばのたけぞしられぬる春みし小松人しひかずは

(三三五七)

おなじく

法橋頭昭

夏草の野島が崎の朝露を分けてぞきつる萩が花ずり

(三三五八)

おなじく

大蔵卿有家卿

夏きてぞ野中の庵は荒れまさる窓とちてけり軒の下草

(三三五九)

おなじく

従二位家隆卿

しげき野と夏も成行くふか草の里はうづらのなかぬばかりぞ

(三三六〇)

承久四年六月八条入道太政大臣家歌合、夏草 よみ人しらず

うづら鳴く夏の草はおひにけりあさふす鹿もみえぬばかりに

(三三六一)

此歌判者頭季卿云、左夏草はくせなくみせ給ふれど、右より、

うづらは秋なんなく、夏鳴かぬものなりと侍るめれば、証歌

こそはいださるべけれど、其歌出でこずはあゆまれるにやと

云云

承安三年経正朝臣家歌合、夏草

前参議親隆卿

いざやこら朝露分けてかりゆかむをしか臥す野の夏の草だち

(三三六二)

おなじく

正三位季能卿

草ふかみむしのたれぎぬ結びあげてとほりわづらふ夏の旅人

(三三六三)

文永三年毎日一首中

民部卿為家卿

夏草の露けき中のしもつけにむろのやしまのことやとはまし

(三三六四)

貞応三年四季百題、夏朝

おなじく

夏草の夜の間の露の下葉までさもほしはつる朝日影かな

(三三六五)

六帖題、新六六

光俊朝臣

御馬草にいくたびかりつ又ばえのしののをすすきほに出でぬ間を

(三三六六)

祿子内親王家歌合、夏草

よみ人しらず

夏草を結ぶしるしのなかりせばいかでゆかまし山里の道

(三三六七)

宝治二年百首

前中納言定嗣卿

遠つ人なづみくるかもみやけぢの夏野の草の茂り行くころ

(三三六八)

三

中世以降、題詠の手本とされたのは、藤原長清が撰定した夫木和歌抄である。夫木和歌抄は中世最大の類題集と位置づけられ、一万七三八〇余首を三六卷五九六題に分類するものである。歌題の構成は、四季一八一題（巻一〜一八）、雑四一五題（巻一九〜三六）で、雑の内訳が、天象・時節・方角（巻一九）、地儀（巻二〇〜二六）、動物（巻二七）、植物（巻二八・二九）、居所（巻三〇・三一）、雑物（巻三二・三三）、神祇釈教（巻三四）、人倫（巻三五）、人事（巻三六）となっている。四季（春・夏・秋・冬）の歌題は、次のように分類されている。

春

歳内立春 朔日 元日宴 立春 初春 子日 卯日 若菜
白馬 御齋会 賭射 鶯霞 余寒 残雪 春水 若草 春霜
梅 柳 早蕨 春雨 稻荷詣 春日祭 遊糸 春駒 燕 花
遅日 春月 帰鴈 春曙 野遊 春野 春海 春雑 三月三日
桃花 雉 喚子鳥 雲雀 苗代 春田 蛙 菫菜 杜若 款冬
藤花 躑躅 暮春 三月尽
夏
更衣 首夏 余花 新樹 卯花 神祭 葵 賀茂祭 早苗

秋

五月五日 菖蒲 橘 花柑子 郭公 五月雨 照射 麦 牡丹
檮 百合 鶉河 水鶏 蛭 夏神楽 夏雑夏夜 夏月 紫陽草
夏草 夏野 蚊遣火 夏衣 扇 瞿麦 瓜 夕顔 蓮 菱
夏田 夕立 蝉 茅蝸 納涼 泉 氷室 夏鹿 夏虫 晚夏
荒和祓
立秋 初秋 残暑 七夕 萩 女郎花 薄 荊萱 荻 蘭
草香 秋花 槿花 秋野 鹿 雁 秋田 稻妻 稻負鳥 月
駒迎 霧 秋風 野分 秋雨 露 秋夕 秋夜 秋雑 虫
小鷹狩 鶉 鳴 擣衣 秋霜 葛 菊 秋水 秋山 蔦 柞
櫨 檀 薛 桐 紅葉 暮秋 九月尽

冬

初冬 時雨 落葉 殘菊 神無月 冬擣衣 冬霧 枯野 霜
寒草 冬風 冬月 冬雨 冬夜 衾 網代 冬雑 千鳥 水鳥
氷 霰 霰 雪 野行幸 鷹狩 豊明節会 賀茂臨時祭 神楽
冬梅 炭竈 仏名 炉火 歳暮
このうちの「夏草」題には次の一八首が撰定されているが、出典の内訳は、類題集（古今和歌六帖）・一首、歌合・八首、定数歌・七首、屏風歌・一首、家集（源俊頼 散木奇歌集）・一首となる。
夏草

検出される。

おくものは久しきものを秋萩の下葉の露の程もなきかな

(八五)

おなじえに花はさけれど秋萩の下葉にわきて心をぞやる

(一〇九)

さをしかやいかがいひけん秋萩のほふ時しもつまをこふらん

(一五五)

さをしかのをのへにさける秋萩をしがらみへぬる年ぞしられぬ

(一八二)

山とほきやどならなくに秋萩をしがらむ鹿の鳴きもこぬかな

(二六三)

秋萩にみだるる玉はなく鹿の声よりおつる涙なりけり

(三五四)

妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらん

(四一七)

鳴く鹿のこゑをとめつつ秋萩のさけるをのへに我はきにけり

(四八七)

さをしかのつまにしがらむ秋萩における白露我もけぬべし

(五九八)

秋萩をみつつけふこそくらしつれ下葉は恋のつまにざりける

(五九九)

つまこふる鹿のしがらむ秋萩における白露われもけぬべし

(六三〇)

秋萩は下葉のよそにみしかどもひとりねんとはおもはざりしを

(六八六)

秋萩の下葉をみつつゆふさればいつしかの音に泣きわたるかな

(六八七)

秋萩のちるだにをしくあかなくに君がうつろふきくぞわびしき

(八六八)

秋萩の下ばにつけてめに近くよそなる人の心をぞみる

(八八四)

貫之にはこのような秋萩の歌があり、その内容には、二〇九四番（秋萩―鹿）、二〇九五番（秋萩―露）をはじめ、万葉集卷一〇の秋萩の歌との類似性が認められることは明らかであろう。この傾向は貫之にみる、平安歌人の万葉集への傾倒の一例と考えてよいのであるまいか。そして、貫之が仮名序に「秋萩」「夏草」の歌をあげた背景に、季節観念の創造者としての入麻呂の存在が想像されるのである。

なのである。『日本古典文学全集万葉集③』の解説には、巻一〇の歌について、「万葉の山辺宿禰赤人とほとんど無関係な、中古の『三十人集』の「赤人集」に収められた歌三百五十四首中二百三十二首までが、この万葉集・巻十の歌である」として、その理由を「平安朝歌人たちの万葉集への傾倒が、格別に分り易くかつ洗練された歌の並ぶこの巻に集中した証」であるとの考察が記されている。

しら露のおかまくをしき秋はぎのをりてみをりておきやからさん
(九五・万二〇九九)

秋の田のかりほのやどの(よどの)にほふまでさける秋萩みれどあかぬかも
(九六)

春さればかすみぐれにみえざりし秋はぎさけりをりてかささん
(九八・万二一〇五)

玉ぼこの君がつかひのたをりたるこの秋はぎはみれどあかぬかも
(一〇〇)

わがやどにさける秋はぎつねならばわれまつ人にみせましものを
(一〇一・万二一一二)

我がやどにうゑおほしたる秋萩をたれかしめさしわれにしらせぬ(ず)
(一〇二・万二一一四)

恋しくはかたみとせんとわがせこがうゑし秋はぎ花さきにけり
(一〇五・万二一一九)

秋萩はかりにあはじといへればかこゑをたてては(ききては)花咲きにけり(はなちりにけり)
(一〇六・万二一二六)

秋萩におけるしら露朝な朝な玉とぞみゆるおけるしら露
(一二〇・万二一六八)

あき萩のさきける野べの夕暮にぬれつつきませ夜はふけぬとも
(一四六・万二二五二)

秋はぎのえだもたわわにおく露のきえもしなましわれ恋ひつつあらば
(一四七・万二二五八)

秋萩におとすしぐれのふる時は人をおきめてこふるよぞおほき我がやどにさける秋はぎちりはて(て)秋にもあは(へ)ぬ
(一四八)

身とやなりなん
(一五〇)

なにすかときみをいとはん秋はぎのそのはつ花の(ちらすしら露)こひしきものを(おきにけらしも)
(一五二・万二二七三)

かりがねのはつ声ならでさきてちるやどの秋はぎみにこわがせこ
(一五三・万二二七六)

古今集七八一番の秋萩の歌は常康親王の詠であったが、前述のように親王の入集歌はこれ一首のみである。古今集歌人で秋萩の歌を多く詠んでいるのは実は貫之であり、貫之集には次のような用例が

常康親王同様、仁明天皇の寵愛を受ける―、遍昭の子素性―遍昭・素性は雲林院に親王没後住す―、躬恒―貫之の無二一の親友―なども、『古今集』を形作る一つの流れ¹⁷⁾として受け止められる歌人たちにあげられている。

貫之が仮名序において、恋歌を代表する「秋萩」「夏草」の歌の作者として、常康親王と躬恒とを選んだ背景に、この「古今集を形作る流れ」すなわち「紀氏及び紀氏と縁を結んでいる作者」への意識があつたことは想像に難くない。常康親王の勅撰集入集は、源常とともに古今集のこの一首のみである事実も、この想像の裏付けとなるものであろう。

貫之が仮名序に「秋萩」「夏草」の歌をあげたもうひとつの要因としては、人麻呂の存在があげられるのではないだろうか。貫之の人麻呂への傾倒は、仮名序に記された「人麿亡くなりたれど、歌のこととどまれるかな」の一文からも理解される。万葉集における夏の歌の歌には、人麻呂による基本的な表現様式の形成があつたと考えられるが、秋萩の歌に関しては、人麻呂との関連性は夏草の歌ほど顕著ではない。万葉集中の「秋萩」の用例の内訳は、「安伎波疑」五例、「秋芽子」六四例、「秋芽」三例、「白芽子」一例、「冷芽子」一例、「秋茅」「芽」子一例、「秋茅」「芽」一例、「秋芽子之花」一例、「秋芽花」一例、であるがこのうちに人麻呂の作と明示されている

ものはみあたらないからである。ただし、巻一〇の二〇九四・二〇九五の次の二首の場合、左注に「右の二首、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり」と記されており、二〇九四番を引く古今和歌六帖（第一・天・しぐれ・四九五）、夫木和歌抄（第二・秋部三・鹿・四五九〇）においても、この左注を受けてともに作者名を人麻呂としているので、秋萩の歌に人麻呂の痕跡が全くないというわけではない。

花を詠む

さ雄鹿の心相思ふ秋萩のしぐれの降るに散らくし惜しも

（巻一〇・秋の雑歌・二〇九四）

夕されば野辺の秋萩末若み露に枯れけり秋待ちかてに

（巻一〇・秋の雑歌・二〇九五）

現存の人麻呂歌集には、国歌大観本の柿本集、私家集大成本の人麻呂集Ⅰ・人麻呂集Ⅱにも万葉集のこの二首はないので、この二首を人麻呂作とする根拠は万葉集の左注のみとなるが、後世の古今和歌六帖、夫木和歌抄の撰編者には人麻呂の和歌として認識されていたことは疑えない。

万葉集における秋萩の歌と人麻呂との関係性は以上のごとくであるが、人麻呂歌集には「秋萩」を詠んだ歌は十数首存在しており、例えば国歌大観本の柿本集には、次の一五首を収める。しかも、このうちの二一首は万葉集巻一〇の秋の雑歌、秋の相聞の作者不詳歌

もみち葉は袖にこきいれてもていでなむ秋は限りと見む人のため
(巻五・秋歌下・三〇九・素性)

④「雪を見る」・冬

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

(巻六・冬歌・三三二・坂上是則)

⑤「鶴亀に託して主君を思う」・賀

鶴亀も千年のちは知らなくに飽かぬ心にまかせはててむ

(巻七・賀歌・三五五・在原滋春・在原時春かとも)

⑥「人をも祝う」・賀

万世を待つにぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば

(巻七・賀歌・三五六・素性)

⑦「秋萩を見て妻を恋う」・恋

吹きまよふ野風を寒み秋萩の移りもゆくか人の心の

(巻一五・恋歌五・七八一・常康親王¹²⁾)

⑧「夏草を見て妻を恋う」・恋

枯れはてむのちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな

(巻一四・恋歌四・六八六・凡河内躬恒)

⑨「逢坂山に至って手向けの神に祈る」・離別

かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけ

れ
(巻八・離別歌・三九〇・紀貫之)

貫之は仮名序において、部立を象徴する歌としてこの九首を撰定しているのだが、その基本方針に明確な形式上の基準——たとえば、各部立の一番歌を引く、あるいは、選者の歌に限定するなど——は見出せない。ただし、作者については、親王（嵯峨帝御子源常、仁明帝御子常康親王）、三十六歌仙（素性・坂上是則）、選者（躬恒・貫之）という構成意図のほか、目崎徳衛氏が『紀貫之』（吉川弘文館、平成20）において指摘された「紀氏及び紀氏と縁を結んでいる作者」という背景が窺える。目崎氏の見解に従えば、「紀氏及び紀氏と縁を結んでいる作者」は『古今集』の判明する作者名のほぼ二〇パーセントに当¹⁴⁾り、「『古今集』成立を考える場合に絶対に無視できない雄大な一山脈を形作っている」とのことである。具体的には次のような作者の名前が並ぶ¹⁵⁾。

貫之・友則・望行・有朋・有常・静子・有常女・秋岑・利貞・

淑人・淑望・惟岳・紀乳母

常康親王・雲林院のみこ（その母は紀静子の姉種子）・惟高親王

（その母は静子）・兼覧王（異説はあるがおそらく惟高親王の

子）・在原業平（有常女を妻とした）・藤原敏行（紀名虎女を母

とし、有常女を妻としたらしい）

業平の子棟梁・磁春 棟梁の子元方

また、常康親王追慕のために出家した遍昭——仁明天皇の子である

七六九番「我が背子に我が恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及くごとし」などの例も、表現の主体は夏草ではなく、その属性である「しげき」「かり」に認められることは明らかである。なお、「露に寄する」という詞書をもつ一九九四番「夏草の露別け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき」は、新古今集に「夏草の露分衣着もせぬになどわが袖の乾く時なき」(巻一五・恋歌五・一三七五)として採られているが、人麻呂歌集の七三番と同形の歌とみなされるものであり、その詞書から判断しても、「露」という語への導入表現と解されるものである。一二七二番「大刀の後 鞘に入野に 葛引く我妹 ま袖もち 着せてむとかも 夏草刈るも」の旋頭歌の場合は、「葛引く」と「夏草刈る」という労働の描写が中心であり、この「夏草」が、夏草の旺盛な生命力、荒々しさへの共感という実感のある風景ではないことも、明らかであろう。

二

紀貫之の古今集仮名序は、「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と始まる和歌の本質論を冒頭に置き、次に和歌の効用・起源・技法・歴史に言及する。次いで勅撰和歌集である古今集の成立事情に触れ、醍醐天皇の命により、延喜五年四月十八日に、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人の選者

たちが、千首二十巻を古今和歌集と名づけて奏覧に供したと記される。この編集過程の説明において、歌の内容の分類配列についての次のような記述がある(部立を示す描写の部分には①～⑨の数字を付す)。

それがなかに、梅を挿頭すよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩・夏草を見つたまを恋ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ撰ばせ給ひける、名づけて『古今和歌集』といふ。

「それがなかに」以下の内容には和歌の一部の抜粋があり、それぞれ、春・夏・秋・冬・賀・恋・離別・雑の部立を象徴する表現が用いられている。以下は、契沖の『古今余材抄』をもとに、これらの表現の古今集中の元歌を検証したものである。

① 「梅を挿頭しとする」・春

鶯の笠にぬふといふ梅の花折りてかざさむ老いかくるやと

(巻一・春歌上・三六・源常)

② 「郭公を聞く」・夏

郭公はつこゑ聞けばあぢきなく主さだまらぬ恋せらるはた

(巻三・夏歌・一四三・素性)

③ 「紅葉を折る」・秋

携はり 鏡なす 見れど飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほし
 し 君と時どき 出でまして 遊びたまひし 御食向かふ 城上の
 宮を 常宮と 定めたまひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れか
 もへに云ふ、「そこをしも」 あやに哀しみ ぬえ鳥の 片恋づまへに
 云ふ、「しつづく」 朝鳥のへに云ふ、「朝霧の」 通はす君が 夏草の 思
 ひしなえて 夕星の か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば
 慰もる 心もあらず そこ故に せむすべ知れや 音のみも 名の
 みも絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名にかかせる
 明日香川 万代までに はしきやし 我が大君の 形見にここを
 (巻二・一九六)

柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に船近付きぬ

一本に云はく、「処女を過ぎて夏草の野島が崎に廬りす

我は」

(巻三・二五〇)

また、三六〇六番「玉藻刈る処女を過ぎて夏草の野島が崎に廬り
 す我は」は二五〇番左注の「一本」にあたり、二五〇番の左注には
 三六〇六番との異同を校訂した「処女を過ぎて夏草の野島が崎に廬
 りす我は」の用例があり、一三八番は一三一番の異文と解されそこ
 には一三一番と同じく「夏草の思ひしなえて」の枕詞例が用いられ
 ているので、これらの人麻呂作品の「一本」「或本」と理解される例

も含めると、万葉集における人麻呂の歌と関連する「夏草」の語例
 は七例を数え、用例の大半を占めることになる。言い換えると、万
 葉の夏草の歌は、人麻呂の和歌にその様式の確立の一端をみること
 ができるものだと考えられるのである。人麻呂歌集にも次のような
 例があることも、このことの傍証となる。

このごろの恋のしげけん夏草のかりはつれどもおひしくがごと
 (六七)

夏草の露わけ衣きぬものをなとかわが袖かわく時なき(七三)

人麻呂の和歌にみる「夏草」の用例はこのように「思ひしなゆ」

「野島崎」「繁」「かり」にかかる枕詞の性格をもち、抽象化された
 観念としての風景を表現するものと言える。このような人麻呂歌の

夏の季節表現の成立事情については、渡瀬昌忠氏による詳細な論

『柿本人麻呂研究 歌集篇上』があり、同書の第二章「季節分類

の論」において、「人麻呂における夏の季節表現は、明確な四季観念

の成立を背景に、中国誌賦の暗示のもと、民間の歌謡や生活を素
 材とし源泉として、創造されたものであった」と指摘されている。

万葉集における「夏草」の語が実景としての実体の希薄性を特色
 とすることは、人麻呂の和歌以外の用例にも共通するものである。

たとえば、三七五三番(長歌)「夏草の 繁きはあれど、一九八四
 番」このごろの恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひ及くごとし、二

夏草乃

卷二・相聞・一三八（一三二・柿本人麻呂歌の「或本」）

卷二・挽歌・一九六・柿本人麻呂

卷三・雑歌・（二五〇・柿本人麻呂歌の「一本」）

夏草之

卷二・相聞・一三一・柿本人麻呂
卷三・雑歌・二五〇・柿本人麻呂

これらのうち、人麻呂の歌であると判明しているのが、二九番、一三一番、一九六番、二五〇番の四首である。

近江の荒れたる都に過るときに、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき 畝傍の山の 櫃原の 聖の御代ゆ（或は云ふ、「宮ゆ」） 生
れましし 神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の下
知らしめししを（或は云ふ、「めしける」） 天にみつ 大和を置きて あ
をによし 奈良山を越え（或は云ふ、「そらみつ 大和を置き あをによし 奈
良山越えて」） いかさまに 思ほしめせか（或は云ふ、「思ほしめか」） 天
離る 鄙にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に
天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は こと聞け
ども 大殿は ことと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち
春日の霧れる（或は云ふ、「霞立ち 春日か霧れる 夏草か 繁くなりぬる」） も
もしきの 大宮所 見れば悲しも（或は云ふ、「見ればさふしも」）

（卷一・二九）

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首并

せて短歌

石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと（二に云ふ、「磯なしと」） 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑ
やし 潟は（二に云ふ、「磯は」）なくとも いさなとり 海辺をさして
にきたづの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻 朝はふる
風こそ寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄
る 玉藻なす 寄り寝し妹を（二に云ふ、「はしきよし 妹が手本を」） 露霜
の 置きてし来れば この道の 八十隈ごとに 万度 かへり見す
れど いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の
思ひしなえて 偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山（卷二・一三二）
明日香皇女の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首
并せて短歌

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡し（二に云ふ、「石なみ」）
下つ瀬に 打橋渡す 石橋に（二に云ふ、「石なみに」） 生ひなびける
玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯
るれば生ゆる なにしかも 我が大君の 立たせば 玉藻のもころ
臥やせば 川藻のごとく なびかひの 宜しき君が 朝宮を 忘れ
たまふや 夕宮を 背きたまふや うつそみと 思ひし時に 春へ
には 花折りかざし 秋立てば もみち葉かざし したへの 袖

夏草の・相寝の浜 野島崎 野市の里 おもひしなゆ

かりそめ しげきおもひ しげり しなゆぬ

ぬじま ぬじまのさき ね ののしま ははは

ふかし

春草の・しげし 繁き我恋 めづらし いやめづらし

秋草の・むすぶ 結びし紐

冬草の・かれ 離れ かれにし 離れにし

「繁」の語は、夏草、春草の枕詞に共通するが、「結」は主に秋草との関連が深い。草や木のたぐいを結ぶ古草結の習俗は、禁忌や誓約を意味するまじないの一種であり、それは「秋草」に限定されるものではないのだが、枕詞の場合は「秋草の・結」の組み合わせが主流のようである。また、「冬草の」という枕詞は万葉集にはみられず、平安朝以降に用いられたもので、「枯」の語に続く用例は、勅撰集のなかでは古今集の「わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず」（巻六・冬歌・三三八）をはじめ七例ほどがあげられる。記紀歌謡の場合、古事記下巻允恭天皇の項にある軽太郎女（衣通郎女）の歌「夏草の阿比泥の浜の搔き貝に足踏ますな明して通れ（八六）」に、夏草の、相寝の浜にかかる枕詞の用例がみられるが、春草、秋草、冬草の語の用例はみあたらない。

これらのことから、「春草」「夏草」「秋草」「冬草」については、

和歌での用例は「夏草」「春草」が古く「冬草」の用例は平安時代以

後となること、それぞれには、独自の機能や特色があり、特に「夏草」の歌は用例数が突出して多くあり、機能も多様化していると考えられること、などの実態が確認できる。

本稿は、和歌における「夏草」の語の特性のいくつかを、このように「春草」「秋草」「冬草」との比較をとおして明らかにしようとするものである。

一

前述のように、万葉集⁶⁾には「冬草」を読んだ歌はみあたらないが、「春草」五例、「秋草」二例に対して、「夏草」の語のある歌は、二首を数える。その一二例の内訳は次のように整理される。

夏草

巻一・雑歌・二九・柿本人麻呂

巻七・雑歌・旋頭歌・一二七二

巻九・雑歌・一七五三・大伴旅人か

巻一〇・夏相聞・一九八四、一九九四

巻一一・寄物陳思歌・二七六九

巻一三・相聞歌・三二九五

奈都久佐能 巻一五・三六〇六（二五〇・柿本人麻呂歌の「一

本」の歌）

夏草 なつくさ『歌題』永久百首題。勅撰集でこの題明示の歌は続後撰集以後七首。初見は天徳四(960)三月三〇日内裏歌合。歌合の歌題に度々取り上げられ、歌材として万葉集に詠まれ、屏風絵の料歌となり、古今六帖の分類項目ともなっている。夏におい茂る諸々の草の総称。題意は、夏草の茂る様を屏風歌風に眺望し、すさまじい生命力を賛美し、草の心を憶測し、述懐の情をからませ詠ずるところにあつた。中世に好まれた歌題。

なつくさの『枕詞』「思ひしなゆ」や地名「野島」「阿比泥の浜」にかかる。夏草が強い日を受け葉が萎えるところから、またその土地の代表的景物を称辞的に冠したものの。「玉藻刈る処女を過ぎて奈都久佐能野島が崎に廬す我は」(万葉三六〇六)「はしきやし吾が妻の子が夏草乃思ひしなえて歎くらむ」(万葉一三八)「那都久佐能阿比泥の浜の蠣貝に足踏ますな明かして通れ」(記・歌謡八七)。平安時代以後も「深し」「茂し」などその属性によって連なる用法が用いられ、新古今集時代までの現存用例は「かれはてん後をばしらで夏草のふかくも人をおもほゆる哉」(古今六八六)など一二例をかぞえる。

このことは、「夏草」に類する歌材とみなすことのできる「春草」「秋草」「冬草」についても同様で、それぞれについて「春草の」「秋草の」「冬草の」という枕詞の用例が検出される。ただし、その用例

数には明らかな差異が認められ、「夏草の」という枕詞の用例数が群を抜く。国歌大観収録歌のうちの、それぞれの枕詞の用例数は次のようになる。³⁾

春草の・二〇首 夏草の・四九一首 秋草の・一〇〇首
冬草の・八六首

おおよその比率は、「春草の」を1とすると、「夏草の」約25、「秋草の」5、「冬草の」約4という結果である。このことは、歌語としての「夏草」についても同様で、「春草」「秋草」「冬草」に比すと、その歌数の多さは際立つものである。国歌大観収録の和歌における「春草」「夏草」「秋草」「冬草」表記に限定した、それぞれの語句を用いた歌の概数は次のようになるが、⁴⁾「春草」「秋草」「冬草」はそれぞれ二九〇〜三七〇首程度であるのに対して、「夏草」の歌は二〇〇〇首を超える。

春草・三六八首 夏草・二二七一首 秋草・二八七首
冬草・三一三首

枕詞について言えば、「夏草の」の用例の数における優位性の一因は、かかつていく言葉の多様性にあると考えられる。『日本うたことば表現辞典枕詞編上・下』(遊子館、平成19)、『新訂枕詞の研究と釈義』(福井久蔵著・有精堂、昭和62)によって検証すると、それぞれの枕詞のかかってゆく表現は次のようにまとめられる。

夏草の歌

青木 眞知子

はじめに

歌集の部立は、四季・恋・雑を基本とするが、「夏草」の語を用いた和歌には、四季部の夏歌ではなく、恋部やその他の部立に収められているものが多くある。たとえば、古今集^①には、「夏草」の語例が二例みられるがどちらも夏歌ではなく、四六二番の「夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな」は巻一〇・物名（「かたの」に、六八六番の「かれはてむのちをばしらず夏草の深くも人のおもほゆるかな」は巻一四・恋部四に収められている。その理由としては、ここでの「夏草」が、実景としての景物ではなく、「夏草の」という枕詞の機能をもつものであることが考えられる。夏草の歌は、その多くが、このような「夏草の」という枕詞の用例で占められていることが注目される。

勅撰集において「夏草」が夏の部立の歌題とされたのは、続後撰集^②

からのことである。続後撰集の夏部の歌数は七十首であるが、そこでの歌題もしくは歌材は、季節の推移に従って、「首夏」「卯花」「郭公」「早苗」（「五月郭公」）「五月雨」「夏夜」「鶺鴒川」「夏暁」「夏草」「螢」「納涼」「夏暮」「六月祓」と並ぶ。このうちの夏草題の歌は西園寺（藤原）実氏による次の一首のみとなるが、この場合も「夏草の」という枕詞の用例と解されるものである。

百首歌たてまつりし時、夏草

つゆむすぶまがきにふかき夏草のなにともなしにことしげの身
や
(巻四・夏歌・二二三)

和歌における「夏草」の語については、このように歌材としての夏草、歌題としての夏草、そして、「夏草の」という枕詞としての機能をみることができる。その詳細を、『和歌大辞典』（明治書院、昭和61）の記述によって、概観しておく。